

論文

尖閣諸島に関する中国史料の研究(三)

—『籌海図編』『日本一鑑』の再検討を中心に—

Chinese Historical Records Concerning Senkaku Islands

(III) : A Study of *Chou Hai Tu Bian* and *Riben Yi Jian*

班 偉¹⁾

Han I

キーワード：尖閣諸島、釣魚嶼、籌海図編、日本一鑑

Key Worlds: SenKaku Islands, Diaoyu Yu, *Chou Hai Tu Bian*, *Riben Yi Jian*

はじめに

尖閣諸島に関する中国史料として、海道針経や使琉球録の他に、明代の海防書『籌海図編』『日本一鑑』も長年、尖閣諸島の領有権を主張する中国・台湾によく利用されてきた。その論法として、前者所収の「福建沿海山沙図」に「釣魚嶼」「黄毛山」「赤嶼」などの島が描かれていることを根拠に、「明代から、釣魚島は福建省の防衛区域に組み込まれていた」と主張する一方、後者の記述の中から「小東島即小琉球」「釣魚嶼、小東小嶼也」といった片言隻句を切り取って、「釣魚島が台湾の附属島嶼だ」とこじつける。しかし、台湾は福建省の府の一つとして設置され、初めて中国版図に編入されたのは清康熙二十三年（1684）の出来事であり、それまで福建と台湾の間で行政上の関係が存在せず、釣魚島が同時に福建と台湾に所属するとはあり得ない話だ。中台の持論は明らかに自家撞着に陥り、史料の曲解による牽強附会の言に外ならない。本稿では、二書の成立経緯を検証した上で、関連史料の再検討を通じて歴史上の尖閣諸島の実相を究明していきたいと思う。

一、『籌海図編』『日本一鑑』の成書経緯

『籌海図編』も『日本一鑑』も、時代の要請を受けて世に現れた倭寇対策書である。中国歴代王朝の例に洩れず、明朝も絶え間なく幾多の内憂外患に翻弄され続けていた。就中、「南倭北虜」という熟語に象徴されるように、北方で騎馬民族の蒙古と攻防戦を繰り返しながら、南方で倭寇の襲来に振り回される事態が長引き、結果的に明朝の命取りとなった。早くも洪武二年（1369）に発端した倭患は、豊臣秀吉の朝鮮撤兵（1598年）を機に漸く終息したが、二百余年の長期にわたって明朝の栄枯盛衰と始終していた。倭寇対策に追わ

¹⁾山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

れていた明朝は国力が疲弊してしまい、これが滅亡の遠因の一つともされる。地域的に北の遼東半島から南の海南島まで、倭寇と呼ばれる武装集団が頻繁に沿海部の城鎮を荒らしまわり、地元住民の生命財産に甚大な損害をもたらしたのは言うまでもない。嘉靖年間（1522～66）、王直・徐海ら中国人海賊が日本人に取って代わって主役となり、「大抵真倭十之三、従倭者十之七」（『明史・日本伝』）と言われるほど倭寇の跳梁が頂点に達していた。

もちろん、朝廷は倭患に悩まされながらも海禁や沿岸警備など様々な対策を講じていた。如何せん官吏の腐敗や官軍の士気低下に加え、沿海住民の生活苦、「寸板不許下海」の海禁令によってもたらされた密貿易の横行など、国の倭寇対策が思うように成果を挙げられず、対倭寇作戦の最高統帥である浙直総督の更迭も頻繁に行われていた。嘉靖三十五年（1556）三月、御史胡宗憲は総督に任命されると、情勢が新たな局面を迎える。胡宗憲は権謀術数に長けた策謀家で、功名心も人一倍強い。就任するや否や、策を弄して陳東・麻葉・徐海など海賊頭目を次々と捕らえ、最終的に王直を誘殺したことで、猛威を振るう倭患の沈静化に幾分奏功した。その際、当時日本九州の五島に拠っていた海賊首領王直を誘引するために、胡宗憲は「宣諭日本」と称して幕僚の蔣洲・陳可願を派遣したが、王直への投降勧誘の他に、豊後・周防地方を支配する守護大名大友義鎮・大内義長の元を訪れ、倭寇の取締りを要請すると共に、日本の内情を探るなど情報収集の任務も命じた。

進士出身の胡宗憲は幾多の時論著述を持つ経世家でもあり、総督在任中、幕府に多くの文人・学者を抱え、シンクタンクとして倭寇退治策の立案に当たったが、幕僚の中に『籌海図編』の著者となる鄭若曾（1503～1570）が一目置かれる存在だった。彼はもともと江蘇昆山出身の貢生で、幾度も科挙試験に挫折した後、不惑の年を前に立身出世の道を断念し、故郷の昆山も度重なって被害を蒙った倭患に関心をもち始め、経世済用の学問を志す。やがて地理学者として頭角を現し、胡宗憲の知遇を得られるようになった。すでに『江南経略』『海防一覽』『万里海防図論』『日本図纂』『琉球図説』などの軍書・地理書（後に『鄭開陽雜著』所収）を世に送った鄭若曾は、胡宗憲の庇護下で嘉靖四十一年（1562）に『籌海図編』十三巻を編纂、刊行した。その内容は、日本の地理歴史・冊貢往来・倭寇事情・海防体制・戦事始末・戦略戦術・徴兵訓練・軍功賞罰・諜報活動・武器装備・社会治安など多岐にわたり、恰も倭寇対策の百科全書の観を呈していると言っても過言ではない。

ここで注目すべきは、『籌海図編』の情報源である。鄭若曾自身が日本渡航の経験を持たず、歴代の文献や幕府保管の公文書を参考にして、『籌海図編』を編纂したと思われるが、参考書目 136 点をリストアップした巻末「参過図籍」を見ると、「釣魚嶼」を記した陳侃『使琉球録』『渡海方程』『海道針經』の三種が含まれている。鄭若曾は『日本図纂』の序文で、「惟日本諸島、訊之長年火掌不知也、訊之擒獲倭奴不知也、訊之貢臣不知也、訊之通事不知也、訊之被擄去人不知也。……胡公教之曰、……蔣洲、陳可願志士也、宣諭日本、能道其山川遠近、風俗強弱之詳、其言不誣。且招夷来廷、数輩陳所睹記。奉化人宋文復持示南畝夷商秘図、参互考訂」と述べ、資料収集の苦労を振り返っている⁽¹⁾。すなわち、彼の周りに日本のことを知る者はおらず、貿易船の船長・倭寇捕虜・朝貢使節・通訳・日本に拉致されたことのある元人質など色々な人に聞いても、一向埒が明かない。結局、胡宗憲の勧めで蔣洲と陳可願に聞き取りし、二人の日本見聞を重要な情報源にした。また、広東南澳にやって来た日本商人が使った航海図も入手したという。『籌海図編』の中身を調べると、『海防一覽』『万里海防図論』『日本図纂』『琉球図説』と同様の記述・地図がふんだ

んに織り込まれており、既刊した自著を増補して十か月足らずの短期間で完成したようだ。

ところで、胡宗憲の前任である楊宜も総督在任中、一度「宣諭日本」の名目で「布衣使者」を募集、派遣したことがある。応募してきたのは、後に『日本一鑑』の著者となる鄭瞬功だった。鄭瞬功は新安郡（徽州歙県）出身の田舎文士で、一旗揚げようと「出海哨探夷情」のスパイ役目に飛び付いたのである。彼は嘉靖三十五年（1556）五月に広州から出発し、大小琉球を経由して七月に豊後に辿り着いたが、大友義鎮に倭寇の取締りを持ちかけたところ、忽ち拘束されてしまった。年末になって漸く釈放され、大友氏の使者を務める僧侶清授と連れ立って帰航の途に就いたが、不運にも嵐に遇い、海上漂流が四十日間も続く。翌年一月、九死に一生を得た二人が辛うじて寧波に辿り着いたが、後ろ盾の楊宜がすでに失脚、胡宗憲から嫌疑をかけられて浙江定海の七塔寺、次いで四川茂州の治平寺に監禁されてしまう⁽²⁾。前後七年に及ぶ幽囚生活の中で、鄭瞬功は『日本国考略』『籌海図編』『日本図纂』『浙江通志』『寧波府志』などの書物を参照し、日本から持ち帰った文献や地図を整理して『日本一鑑』を編纂したと思われる。成書時期は嘉靖四十四年（1565）頃と推定されるが、1939年に北京文殿閣より影印刊行されるまで世に埋もれていた。内容は支離滅裂で、重複する部分が多く、同じ事柄をあちこちに書き散らしている。参考書からの引用なのか、自身の見聞なのか、それとも伝聞なのか文章が入り乱れ、非常に分かり難い。鄭瞬功は一介の無名文士に過ぎず、文章は甚だ稚拙で、『日本一鑑』の構成と言葉遣いを見る限り、手記か雑録の域を出ないというのが率直な印象である⁽³⁾。

『日本一鑑』の冒頭で、鄭舜功は編纂動機・経緯について縷々饒舌を弄している。曰く、「奏奉宣諭、歴履鯨波、行忠信之言、彰文德之教。東夷聽信、禁令乃行。館彼六月、諮其風俗、詢其地位。得聞其説、得覽其書。……故命從事、將其図冊繪録之、備按書編、遂為類聚、以寄社役之談。歸于王師、計數之秋、輒以文告下獄、……是書棄置既久矣。曩在縲紲、適客問曰、使於四方、如琉球者有紀錄、如松漠者有紀聞、天使日本、夫豈無録無聞焉。告語見聞、曾有成集、……將貽救世士君子、我後之使者、未必不資其説云。」⁽⁴⁾ 自画自賛の部分を引き引いて、文のポイントを要約すれば以下の通りである。自分は危険を冒して日本にお使いし、半年かけて資料や地図を集めて持ち帰ってきた。不幸にも下獄七年という扱いを受けることになり、文稿の編纂もつい怠ってしまったのだが、偶々見舞いに来てくれた友人に勧められ、為政者や後輩使者の参考にでもなればと思って編纂を再開することにした。上の告白から成書経緯の一端を知ることができるが、共に拘禁されていた日本人僧侶清授の協力を得られてこそ、成し遂げられたものと推察する。

いわば臥薪嘗胆の思いで、『日本一鑑』の編纂に励んだ鄭舜功だったが、書中至る処で自らの不運を嘆き、青雲の志を吐露している。「張騫出自草莽、非奉使命、終老無聞。功亦草莽、時際聖明、奉使化外、功將垂成。不罹媚嫉、然則東海蕩平矣。而功豈下張騫耶？……孤憤不已、遂以見聞類編成集、目曰窮河話海。及凡古今馭夷之事、知則悉載。上陳天覽、下匡時政。」⁽⁵⁾（草莽出身の張騫は、使節として派遣されることがなかったら、生涯無名で終わっただろう。自分も草莽の一人だが、勅命を奉じて日本に派遣され、後少して功成り名を遂げるところだった。妬まれることがなかったら、倭患何かとくに片付けられ、功名も張騫に引けを取らないはずだ。……孤憤に堪えて日本見聞をまとめ、「窮河話海」と名付けた。古今の治夷策を詳記し、上は皇帝の一読を願ひ、下は時世を正すことを望む。）怨み節が延々と続くが、その後の彼の消息については一切明らかでない。

『日本一鑑』は「絶島新編」四巻・「窮河話海」九巻・「桴海図経」三巻から構成され、内容の大略を記せば以下の通りだ。「絶島新編」は日本の地図・地名の掲載が中心で、「窮河話海」では歴史・物産・風習・文字・言葉・朝貢など多岐にわたって日本事情を紹介している。「桴海図経」と言えば、著者の渡日航程や日本の海路・島嶼に関する記述が多い。日本の国語学界では、これまで「窮河話海」巻四「文字」、巻五「寄語」を中心に、近世国語研究資料としての価値を重視する観点から、「明代における日本研究の頂点を示すもの」として高く評価する節もあるが、本稿では、『籌海図編』の内容を検討した後、「桴海図経」巻一の「万里長歌」を中心に、尖閣諸島関連の史料に考察を加えることにする。

二、「福建使往日本針路」の読み方

『籌海図編』卷之二上には、日本への使節派遣の歴史を概説する「王官使倭事略」の後、歴代使節が辿った航路を記した「使倭針経図説」がある。航路二本のうち、「太倉使往日本針路」は太倉から浙江近海の九山（現在の韭山列島）までの航路を記しているが、九山より先の航路は略して書いていない。もう一本の「福建使往日本針路」は、福建—琉球航程と琉球—日本航程の二段に分かれ、前者には尖閣諸島の古名が幾つか見える。

先ず、史料の原文を見てみよう。「梅花東外山開船、用単辰針、乙辰針、或用辰巽針、十更船取小琉球。小琉球套北過船、見鷄籠嶼及花瓶嶼、彭嘉山。彭嘉山北邊過船、遇正南風、用乙卯針、或用単卯針、或用単乙針；西南風、用単卯針；東南風、用乙卯針、十更船取釣魚嶼。釣魚嶼北邊過十更船、南風用単卯針；東南風用単卯針、或用乙卯針、四更船至黃麻嶼。黃麻嶼北邊過船、便是赤嶼。五更船、南風用甲卯針；東南風用単卯針；西南風用単甲針、或用単乙針、十更船至赤坎嶼。赤坎嶼北邊過船、南風用単卯針及甲寅針；西南風用良寅針；東南風用甲卯針、十五更至古米山。古米山北邊過船、有礁、宜知避。南風用単卯針及甲寅針、五更船至馬崙山。馬崙山南風用甲卯針、或甲寅針、五更船至大琉球。」⁽⁶⁾ やや長文だが、「福建梅花所→小琉球→鷄籠嶼・花瓶嶼・彭嘉山→釣魚嶼→黃麻嶼→赤嶼・赤坎嶼→古米山→馬崙（齒）山→大琉球那霸港」という順次は、基本的に『順風相送』の「福建往琉球」や『指南正法』の「福州往琉球針」と相似し、風向・針位の記述がより詳しい。「太倉使往日本針路」題名の下方に「見『渡海方程』及『海道針経』」という注記があるので、「福建使往日本針路」条もこの二種の海道針経の抄録と考えられよう。

文末のコメントにおいて、鄭若曾は「已上針路、乃歴代以来及本朝国初中国使臣入番之故道也」（以上の針路は、歴代及び明初期の使節が渡日の際に利用した航路だ）と書き添え、明の領域ではなく、冊封使が辿った渡航ルートとして記載した旨を明記している。つまり、文中の「釣魚嶼」「黄麻嶼」「赤坎嶼」といった島は、前後にある「鷄籠嶼」「彭嘉山」「古米山」「馬崙山」と同様、あくまで福建—琉球航路に散在する標識島として記録された点で、海道針経や使琉球録の関連記載と変わらないのだ。

それにしても、「福建使往日本針路」の記載には混乱が多すぎる。先ず、赤尾嶼を指し示す島名として、「赤嶼」と「赤坎嶼」の二つが登場している。また、天啓四年（1624）の本衙蔵版では、本文の上欄に各島の絵図がずらりと並べられているが、「釣魚嶼」ではなく、「釣魚山」と表記され、本文にある「赤嶼」がなぜか欠落した⁽⁷⁾。つまり、本文と絵図の表記が一致しない。さらに、後述する「福建沿海山沙図」と照合すると、本文と絵図にある「黄麻嶼」は「黄毛山」と表記され、「赤坎嶼」の代わりに「赤嶼」が描かれている。

このように、本文・上欄の絵図・福建沿海山沙図三者の表記が食い違い、二転三転する。多作の著述家ではあるが、鄭若曾が自ら日本渡航の経験を持たず、様々な参考書の記載や口コミ情報を鵜呑みにして一冊を成した所以であろう。こうした不備・欠陥が自ずと『籌海図編』の史料記載の信憑性を損なうことは言うまでもない。

ついでに言うと、『籌海図編』「福建使往日本針路」条は、自著『日本図纂』では同名、『琉球図説』では「福建使往大琉球鍼路」という題名で収録されている。また、若干の字句の相違があるものの、慎懋賞『四夷広記』（16世紀末）の「東夷広記」、王在晋『海防纂要』（1613年）巻二、茅瑞徵『皇明象胥録』（1629年）巻一「琉球」、顧炎武『天下郡国利病書』（1662年）巻一百十九「九辺四夷」などの史籍にも転載されている。

三、「福建沿海山沙図」に見る明朝の海防区域

さて、『籌海図編』巻之一所収の「福建沿海山沙図」と言えば、中台側が好んで取り上げる「有力な証拠」の中でも、切り札の部類に入る。何せ九枚綴りの図面に沿岸部の陸地（図の下端）と島嶼（図の上端）がびっしりと詰まっっていて、うち「福建七」「福建八」の二枚には「釣魚嶼」「黄毛山」「赤嶼」などの図絵が見える。一見、中台側にとって好都合のように思えるが、そこには、又しても「不都合な真実」が隠されているのである。

第一に、「福建沿海山沙図」の完成度は低く、島の名称や位置関係がかなり怪しい。羅源・寧徳両県の沖合に台湾や尖閣諸島らしき島嶼が描かれているが、その名称・配列を地図の右（南）から左（北）へと追っていくと、「鶏籠山」→「彭加山」→「釣魚嶼」→「花瓶山」→「黄毛山」→「橄欖山」→「赤嶼」の順次になっている。「釣魚嶼」は「彭加山」（台湾彭佳嶼、「福建使往日本針路」では「彭嘉山」と記す）と「花瓶山」（台湾花瓶嶼）の間に挟まれているし、「黄毛山」と「赤嶼」の間に位置する「橄欖山」も正体不明だ⁽⁸⁾。様々な参考書から得た情報を無造作に盛り込んだ所以であろう。

第二に、「福建沿海山沙図」を除いて、『籌海図編』には「輿地全図」をはじめ広東・福建・浙江・直隸・山東・遼陽六省の山沙図・沿海総図・府境図も多数収録されている。明代福建省の領域・境界を確かめるなら、巻之四「福建沿海総図」「府境図」を見れば一目瞭然のはずだ。ところが、全国地図に当たる「輿地全図」では、南に「占城」（ベトナム）「暹」（暹羅＝タイ）から、北に「朝鮮」「新羅」まで書き込まれているにも関わらず、尖閣らしき島々が悉く欠落している⁽⁹⁾。「福建沿海総図」では、「澎湖嶼」（澎湖列島）の他に、「上竿塘山」「下竿塘山」（いずれも馬祖列島）、「大担嶼」「小担嶼」（いずれも金門島）など沿海島嶼が数個描かれているだけで、釣魚嶼どころか、鶏籠山や小琉球すら存在しない⁽¹⁰⁾。さらに、福建各府州の「漳州府境図」「泉州府境図」「興化府境図」「福州府境図」「福寧州境図」の全部を調べても、やはり幾つかの沿海島嶼しか表記されず、「府境図」の下方に「南抵海」と記している（今の方位で言えば東を指す）⁽¹¹⁾。ちなみに、明代福建地方志を悉く調べても、釣魚嶼の「釣」の字も出てこない。

第三に、『籌海図編』巻之二下「日本国論」「日本紀略」の末尾には、「日本島夷入寇之図」が添付している。「安南」から「朝鮮」までの広範囲にわたって中国沿海部と東シナ海の海域をカバーする図面には、「日本」「大琉球」「薩摩州」「五島」「対馬島」が描かれ、「倭寇至直浙山東総路」「倭寇至閩広総路」「從此入福興」「從此入泉漳」「從此入温州」など倭寇の侵入ルートを克明に示しているが、尖閣らしき島嶼は見当たらない⁽¹²⁾。この「日本島夷

入寇之図」こそ、中台論客の主張する「海防区域を示す軍用地図」に当たり、自著『日本図纂』の他に⁽¹³⁾、類書『図書編』（章潢、1577年）巻五十七、軍書『武備志』（茅元儀、1621年）巻二百十にも収録されている。「釣魚島は明朝の海防区域に組み込まれていた」云々、ここにおいて全く成り立たない。

第四に、『鄭開陽雜著』巻八『海防一覽』所収の「万里海防図」（1552年）は、『籌海図編』の各沿海山沙図の原型と思われるが、『籌海図編』以上に出来が悪い。「第六幅」では、「釣魚嶼」と「赤嶼」の間に「黄毛山」「花瓶山」「黄茅嶼」が挟まれ、「鷄籠山」「彭加山」と「釣魚嶼」の間に「北山」「衣裏山」といった架空の島まで描かれている。図面の左上方に「大琉球国」があるのに、その左上に蛇足の「大琉球山」も描かれている⁽¹⁴⁾。また、「第五幅」の右上方に「小琉球」（台湾）が見えるが、「鷄籠山」「彭加山」とかけ離れている上、左隣に「蝦夷」（北海道）、右隣に「婆利」（インドネシア・バリ島）がそれぞれ配置され⁽¹⁵⁾、島名も位置も完全に混乱している。まさか鄭若曾がこれらの島々をすべて「中国の固有領土」として自作の地図に書き込んだとは思わない。

第五に、鄭若曾『琉球図説』の「琉球国図」は、中台側にとって最も不利な史料となる。その構図として、琉球国の周辺に「釣魚嶼」が「小琉球」「彭家山」「鷄籠嶼」「花瓶嶼」「澎湖島」と並んで配列され、同書「山川」条では「澎湖島」「高華嶼」「龜鼉嶼」といった澎湖列島の旧名が「古米山」（久米島）とともに記されている⁽¹⁶⁾。この「琉球国図」は、『図書編』巻五十、『三才図会』地理十三卷（王圻、1609年）など明代類書にも収録されているが、中台側の理屈に従えば、鄭若曾・章潢・王圻ら明代の学者たちが皆、尖閣諸島のみならず台湾・澎湖列島まで琉球国の領土と見なしているから、「琉球国図」に書き込んだという結論になる。中台論客が決してこの史料に触れようとしたくないのは無理もない。

では、「福建沿海山沙図」の構図をどう理解したら良いのだろうか。そもそも、沿海山沙図とは、どんな性格を有する地図なのか。一言で言えば、文字通り沿岸の陸地と島嶼の位置関係、衛所・港・烽火台など軍事的要所を示す見取り図である。そのため、各府県の沿岸部だけ描かれる半面、「定海所」「白石巡檢司」「小埕水寨」「石湖烽墩」といった軍事拠点が悉く記されている。すなわち、倭寇の襲来ルートや上陸地点を想定し、防衛上必要不可欠と思われる要衝・区域を描いた広域図であり、いわゆる「海防不設險於海岸、而設險於海中山沙」⁽¹⁷⁾（海防というものは海岸ではなく、島嶼に設けるべきだ）という発想に基づいて製作された軍用地図の一種に他ならない。

「万里海防図第二幅」の書き込み「繪海図説」には謎を解くヒントがあった。曰く、「海図以沿海險要為重。如広福諸郡有正東、正南、東南所向之不同、非曰一字同向也。故但標識其大要、以見身立中国而經略夫外裔、益推移之活機也。」⁽¹⁸⁾（海防図は沿岸の要衝に重点を置く。広東・福建各府は海岸の向きがそれぞれ異なるが、海防図ではその大要を示し、中国に立って周辺諸国の形勢を通観するように描いたものだ。）すなわち、中国本土から周辺海域や隣国を含む広範囲の海防区域全体を見渡せる一覽図で、福建行政区地図ではない。現に、「万里海防図」において、「釣魚嶼」の他に「大琉球」「小琉球」「蝦夷」「婆利」といった諸外国や架空の島まで書き込まれたのに対し、福建各府県の領域を示す『籌海図編』の府境図には「釣魚嶼」も「小琉球」も欠落している。『海防一覽』の後書「図式辨」で、鄭若曾は「海洋は上、陸地は下」という山沙図・海防図の製図原理について、「古今画法、皆以遠景為上、近景為下。外境為上、内境為下」と説いた⁽¹⁹⁾。つまり、沿海山沙図に書き

込まれた島嶼（外境）と中国領（内境）はイコールでないということだ。

もう一つ証拠を挙げると、『籌海図編』巻之四には「福建兵制」（兵力配置）、「福建倭変紀」（戦事始末）、「福建事宜」（防衛体制）などの章節があり、抗倭作戦の経緯を詳細に記録している。これらの公式記録を読む限り、釣魚嶼への言及はなく、官軍が尖閣諸島に上陸、駐留、もしくは周辺海域で倭寇船隊と一戦を交えた記録など一切存在しない。考えてみれば、倭寇というのは豊かな地域の住民から金銀財宝を略奪することを目的とする海賊集団である以上、わざわざ無人島の尖閣諸島を襲撃したり占拠したりするはずがない。

それより、明朝水軍の装備・戦力・士気から見ても、尖閣諸島まで巡視・海戦を行えるほどの実力を有していたと思えない。『籌海図編』の編纂に協力した都御史唐順之の告発が興味深い。「臣視師東南、備觀怯將情狀。一聞賊戰、如澆冷水、顔色可憐。縦不便走、股已先慄、雖亦未必人盡若然、而若然者固多矣。至於倭賊渡洋、談笑飲食、若履平地。而我將棲泊近岸、日遇海風、則頭捍目眩、夜聞潮声、則耳聾心惕。且夫倭賊有過藐我將之氣、而我將無必吞倭賊之氣、則是未戰而索然也。如此而望長驅海島、掃清大慙、臣猶以為難也。」⁽²⁰⁾（東南沿海各地を視察し、官軍の臆病ぶりを詳らかに観てきた。倭寇と聞いただけで、天辺から氷水をかけられたかのように顔色が真っ白、逃走まで行かなくても、足がもう震えてしまう。全員とは言わないけど、大半こんな有り様だ。片や倭寇は海を渡る時、談笑自若、平地を歩くが如し。官軍の戦船は日頃港内に停泊するため、昼は海風を浴びただけで眩暈し、夜は潮の音を聞いただけで動悸する。倭寇の眼中には官軍何かなく、官軍には倭寇と戦う気力がない。戦いが始まる前に勝負はすでにお決まりだ。このようなお寒い現状では、海戦を期待しても無理だ。）早い話が明の軍勢は「烏合の衆」の一言に尽きる⁽²¹⁾。とくに倭寇の巢窟と化した澎湖・台湾に対しても手も足も出ない有様で、遙かなる尖閣諸島に至っては尚更力が及ばぬところだ。「福建倭変紀」には、「與賊戰於九山大洋」（浙江韭山列島）、「追擊至東洛外洋」（浙江北麁山）、「大敗倭賊於屏風嶼海洋」（福建台山列島）、「追敗之於梅花外洋」（福建梅花）、「官兵乘勝追至広東南澳外洋、大捷而帰」（広東南澳）といった武勇伝も散見されるが、いずれも近海での戦事に他ならない。

もう一つ帆船時代の物理的問題もある。蒸気動力船が発明されるまで、帆船による外洋航海は、季節風と海流を利用する外に方法がなかった。各種の海道針経が風向・針位の記載に詳しいのは、そのためである。『籌海図編』の「日本紀略」によると、「大抵倭舶之来恒在清明之後。前乎此、風候不常、届期方有東北風、多日而不変也。過五月風自南来、倭不利於行矣。重陽後風亦有東北者、過十月風自西北来、亦非倭所利矣。」⁽²²⁾（倭寇船がやって来るのは常に清明の後だ。それより前、風向は不安定、清明が過ぎると東北風が吹き始め、当分続く。五月を過ぎると風が南から吹いて来るので、倭寇にとって不利だ。重陽が過ぎると、また東北風が吹くが、十月に入ると風が西北から吹いてくるので、倭寇にとってまた不利になる）という。仮に中台論客が主張したように、明朝水軍の戦船が尖閣諸島まで倭寇を追撃したり、海上パトロールを実施したりしたとすれば、風向・海流に逆らって福建・浙江沿岸に引き返すことは先ず不可能だ。また、木造船の構造から考えても、外洋航海の遭難リスクが非常に高い。以下、当事者の証言から二、三の例を挙げておこう。

副使張情の話によると、「禦寇海洋、使不得登陸、乃為上策、当事諸公多主此説。然而大海汪洋、禦之甚難。賊之来也、必乘風潮之順、吾往迎之必逆、逆而擊之、不其難乎？賊之去也、亦必乘風潮之順、吾同其順而追之、愈追愈遠、能必其相及乎？即使及矣、逆風之

中不難帰乎？」⁽²³⁾（高官の多くは洋上で倭寇を撃退すべきで、上陸を許してはいけないと言うが、茫々たる大海原のことで、言うは易く行うは難し。倭寇船は来る時、必ず順風に乗ってやってくるので、迎え撃ちしようと思っても、風潮に逆らって撃つのは至難の業だ。逆に撤退する時も必ず潮流に乗って去っていくので、追撃しようと思っても追いつくはずがない。仮に追いついたとしても、逆風の中でどうやって戻れるのだろうか。）

知府敵中に言わせれば、「外洋禦寇、豈不是上策、但在将官、有難於奉行者。何也？海中無風之時絶少、一有風色、天氣即昏、面对不相見矣。須十分晴明、方能瞭遠。歳在己未、颶風大作、四百戰船、一斉覆没。利害如此、将官出哨、豈敢遠浮大洋！必尋壘内収泊、令一二小舟行探耳。若迎風而上、遇敵帰報、賊使順風、瞬息數百里、報至賊亦至矣。若順風而去、遇敵帰報、甚難甚難。……故謂海戰為可恃者、必其未嘗親至海洋者也」という⁽²⁴⁾。

（外洋で倭寇撃退云々、確かに上策だろうが、将官にしては実行するのが難しい。なぜなら、海上で無風の時は殆どなく、風が少しでも吹くと空が真っ暗、視野が悪くなる。よほど晴れた日でないとは航行の眺望もままならない。以前、嵐で四百隻の戦船が一斉に沈没する大惨事もあった。このような危険があるので、将官は遠洋まで巡回する度胸が更々ない。大抵港内に停泊し、一、二隻の小船を出して偵察させて済ませる。風向きに逆らって上り、敵船に遇って報告に戻ろうとしても、倭寇の船も順風に乗ってすぐやってくる。斥候船が着くや否や、倭寇船も着いてしまう。逆に順風に乗って追跡する場合、敵船に遇って報告に戻るのには難しい。……海戦を云々する輩は、大抵海のことを知らない連中だ。）

さすがに抗倭名将で、俞大猷の発言は要点を尽くしている。「今言禦賊於海也易、要非通論。海本遼闊、舟行全籍天風與潮、人力能幾？風順而重、則不問潮候逆順皆可行。若風輕而潮逆、甚難。……兵船在海、海舟遇晚、俱要酌量収泊安壘、以防夜半發風。至追賊、亦要預計今晚収泊何壘。若一意前追、遇夜風起、悔無及矣。」⁽²⁵⁾（海上防御云々、言うのは簡単だが、所詮机上の空論に過ぎない。海が果てしなく広く、航行はすべて風と潮が頼りで、人の力ではどうにもならない。順風なら逆流でも航行できるが、風が弱く潮も逆流だとお手上げだ。……海に出ると、夜の船着き場を見付けるのが死活問題で、夜半に風が吹くと危険極まりない。倭寇船を追撃する時、先ず今夜どこに停泊するかを考えておかなければならない。猪突猛進に追いかけると、夜風が出て後悔しても後の祭りだ。）

要するに、「明朝水軍の釣魚島防衛」云々、素人の発想に過ぎない。「福建沿海山沙図」に「釣魚嶼」を書き込んだ鄭若曾の意図は不明だが、強いて言えば、倭寇襲来ルートに近い島なので、本土防衛上の警戒区域として一応念頭に入れておく、という程度のものではないか⁽²⁶⁾。それより、胡宗憲が考えた防衛ライン設定は至って単純明快だ。曰く、「防海之制、謂之海防、則必宜防之於海、猶江防者、必防之於江、此定論也。……所議者、欲分番乍浦之船以守海上洋山；蘇松之船以守馬蹟山；定海之船以守大衢山、則三山品峙、哨守相聯、可扼來寇。而又其外、陳錢諸島、尤為賊衝、三路之要。……副總兵俞大猷統領戰船住扎海上、防賊截殺、則如陳錢、乃其所當屯泊。而提督軍門及海道等官、每於風汛時月、相參巡察。……賊入使不得越過各島、……而內地安堵矣。」⁽²⁷⁾（海防の要は島防衛にある。……役割分担として、乍浦の戦船は洋山を守り、蘇松の戦船は馬蹟山を守り、定海の戦船は大衢山を守るようにすべきだ。鼎立する三島の間を巡回する連携体制を取れば、倭寇を制することができよう。その外側にある陳錢山は倭寇侵入ルートの要衝に当たり、副總兵俞大猷率いる艦隊を駐屯させ、各提督や海道守備が戦船を率いて定期的に巡回すれば、倭

寇が列島線を越える心配がなく、本土安泰だ。)「洋山」「馬蹟山」「大衢山」「陳銭山」は、いずれも沿海山沙図にある「外洋山島」で、浙江省の舟山群島・嵎泗列島に属する。

なお、萬曆四十五年(1617)、福建海道副使の韓仲雍が倭商頭目明石道友を尋問した際に発した言葉も証左の一つだ。「……所經浙境乃天朝之首藩也。迤南而為台山、為礮山、為東湧、為烏坵、為澎湖、皆我閩門庭之内、豈容汝涉一跡? 此外溟渤華夷所共、窮兵芟薙、漢過不先。」⁽²⁸⁾ (お前ら倭船が最初進入した浙江の領域は天朝の要地だ。南へ行くと台山・礮山・東湧・烏坵・澎湖などの島があり、いずれも我が福建の領内で、立ち入りはお断り。それより先の海域は華夷共有の空間であり、何が起きようとして関与しない。)

『籌海図編』には「洪武七年、靖海侯呉禎敗倭於琉球洋」⁽²⁹⁾、「命靖海侯呉禎率沿海各衛兵出捕、至琉球大洋、獲倭人船、送京師」⁽³⁰⁾などの記述もあるが、具体的にどの水域を指しているかは不明だ。「琉球」呼称の用例に鑑み、台湾海峡を指しているのではないかと推定する。それより、『明実録』には「戊子、倭寇犯浙江温台境、官軍出海、擊収之於塢口、竹嶼、逐出外洋而還」といった記載が多数存在する以上⁽³¹⁾、明朝の海防区域は近海に限られていたと言え、⁽³¹⁾「当たらずとも遠からず」であろう。

四、「小東島」「小東小嶼」の意味

さて、『日本一鑑』に目を転じると、ここにも尖閣諸島関連の史料が幾つか見られる。第三部「桴海図経」は、「萬里長歌」「滄海津鏡」「天使紀程」の三巻から構成されているが、巻一「萬里長歌」は七言詩と割り注の形で鄭舜功自身の日本渡航の経緯と航路を記し、巻二「滄海津鏡」は日本の地図や海島図を多数収録している。そして、巻三「天使紀程」は主に日本周辺の島嶼・海道・里程などに関する紹介となっている。

先ず、「萬里長歌」の詩文を見てみよう。「欽奉宣諭日本国、驅馳嶺海乘槎出」と詠い始める七言詩の体裁を取っているが、句ごとに長い割り注を施している。文中、「釣魚嶼」などの島名が数度登場してくる(引用文の中、[]で括った部分は原文の割り注)。

- ①「一自回頭定小東、前望七島白雲峰。[……或自回頭徑取小東島、島即小琉球、彼云大恵国。……夫小東之域、有鷄籠之山。……而我取道鷄籠等山之上、徑取七島。七島之間、為琉球日本之界。……此昔我之使程也]」⁽³²⁾ (針路として回頭より小東を定め、前方に七島の白雲峰を望む。……或いは回頭から真っ直ぐ小東島を目指す。小東島は即ち小琉球、彼らが大恵国と呼ぶ。……小東の域には鷄籠山がある。……私は鷄籠山の北を過って真っ直ぐトカラ列島に向かった。トカラ列島の間は琉球と日本の境である。……これは昔、自分が使節として派遣された時に辿った航程だ。)
- ②「或自梅花東山麓、鷄籠上開釣魚目。[……取小東島之鷄籠山。自山、南風用卯乙縫鍼……約至十更取釣魚嶼。自嶼遠近多巨鮫、……小東巨鮫、……自梅花渡澎湖之小東、至琉球、到日本、為昔陳給事出使琉球時、從其從人得此方程也。……釣魚嶼、小東小嶼也。尽嶼、南風用正卯鍼……約至四更取黃麻嶼]」⁽³³⁾ (或いは梅花の東の山麓を出帆し、鷄籠山の北で釣魚の目を開く。……小東島の鷄籠山を目指し、そこから南風なら卯乙針を用いて、……約十更で釣魚嶼を過る。嶼の周辺に巨大サメが多い。……小東の巨大サメ、……梅花所より澎湖の小東へ渡り、琉球に至り日本に着くというのは、昔、陳侃が冊封使として琉球に派遣された時、從者から教わった針路だ。……釣魚嶼は小東の小島、そこから南風なら卯針を用い、……四更で黄麻嶼を過る。)

- ③「黄麻赤坎古米巔、馬齒琉球里迤先。[黄麻、赤坎、古米、馬齒、琉球、里迤皆海山也。尽黄麻嶼、南風用甲卯縫鍼……約至十更取赤坎嶼]」⁽³⁴⁾（黄麻・赤坎・古米の山頂、馬齒・琉球・里迤の先。黄麻・赤坎・久米・慶良間・琉球・伊江島は皆海中の島だ。黄麻嶼を過ぎると、南風なら甲卯針を用いて、……約十更で赤坎嶼を過る。）

稚拙な詩文だが、鄭舜功が「釣魚嶼」「黄麻嶼」「赤坎嶼」の存在を知っていたことは確かである。留意すべき点は三つある。①によれば、鄭舜功自身が「鷄籠山の北→七島→日本」というルートを通ったので、尖閣諸島を通過していない。②によれば、「梅花→鷄籠山→釣魚嶼→黄麻嶼→赤坎嶼→古米山→馬齒山→琉球」ルートは、あくまで冊封使陳侃が辿った航路として記されている。そして①②③で、「小琉球」「鷄籠山」「釣魚嶼」「黄麻嶼」「赤坎嶼」の帰属について一言も触れていない。否、「統漂小琉球、此島夷不遠於禽獸爾。」⁽³⁵⁾（途中、小琉球に漂着したが、そこに棲む島夷は禽獣に近い）など本人の所感を讀むと、鄭舜功が「小琉球」（台湾）でさえ中国領と見做していないことは明らかだ。

卷二「滄海津鏡」の海島図と照合すると、上の史料の意味が一層はっきり読み取れる。図面の右の端（南）から左（北）へと連なる島々の中、「鷄籠山」には「小東島即小琉球、彼云大恵国」という注記が付している。左へ行くと、「花瓶嶼」「釣魚嶼」「彭嘉山」「黄麻嶼」「赤坎嶼」「古米山」「馬齒山」「大琉球国」……更に日本の島々が列しているが⁽³⁶⁾、使琉球録の「過海図」「針路図」と異なり、福建の海岸・港湾・島などが一切描かれず、いきなり「鷄籠山」からスタートし、琉球・九州・四国・本州の山城（京都）まで図面が続く。すなわち、「鷄籠山」「小琉球」「釣魚嶼」「黄麻嶼」「赤坎嶼」を、明朝の領域ではなく、琉球・日本の領域とくっ付けて一枚の地図に収めたという描き方からも、鄭舜功がこれらの島に対して「中国領」という認識を持っていないことが窺えよう。

「萬里長歌」の詩文は出帆した広州の港から書き出し、延々と琉球や日本各地へ続き、更に「日本古来向中天、新羅楽浪經朝鮮」まで詠い上げているが、全体として日本周辺の海路や島に関する記述の分量は圧倒的に多い。但し、鄭舜功自身の渡航を述べる部分では釣魚嶼への言及がなく、「窮河話海」「絶島新編」における渡日・渡琉関連の章節を見ても、釣魚嶼の存在に触れていないことを見過ごしてはならない。

- ④「窮河話海」卷之七「貢道」：「功前奉使日本時、浙直福海皆有賊、故取道広。初自潮門、馬耳澳放洋、用良寅縫鍼、略遵給事中陳侃出使琉球水程。一自閩海烏丘山放洋、值西南風、用良寅縫鍼、……取有馬島、島属肥前国。」⁽³⁷⁾（かつて使者として日本へ渡る時、浙江・直隸・福建の沿岸は海賊が暴れまわっていたため、広東から出発することにした。初めは潮門・馬耳澳から出帆し、良寅針を用いて、陳侃が辿った航路を参考にした。また、福建烏丘山から出航し、西南風に乗って良寅針を用いて……有馬島に到着した。島は肥前国に属する。）
- ⑤「絶島新編」卷之一：「備按：夷域……正南大海行四五日、至大琉球国。西南大海行八九日、至小琉球国。正西大海行四五日、至中国浙江之寧波。」⁽³⁸⁾（備考、日本……南へと帆走し、四、五日で大琉球に着く。西南へと帆走し、八、九日で小琉球に着く。西へと帆走し、四、五日で中国浙江の寧波に着く。）
- ⑥「絶島新編」卷之一：「一自大隅之棒津、水行大琉球、程計二千五百八十里。……水行小琉球、程計五千五百二十里。一至寧波、程計三千七百里。至福建、程計五千五百里。至南澳、程計六千五百余里。至広東、程計七千余里。」⁽³⁹⁾（大隅の棒津から出航し、

大琉球まで二千五百八十里。……小琉球まで五千五百二十里。もう一つは寧波まで三千七百里。福建まで五千五百里。南澳まで六千五百里。広東まで七千余里。))

⑦「絶島新編」卷之三：「日本……正南去大琉球四五日、西南去小琉球八九日、正西入寧波五六日。……大隅水行入寧波五六日、入福建十日、入潮州十余日、入広東十二三日。」⁽⁴⁰⁾ (日本……南の大琉球まで四五日、西南の小琉球まで八九日、西の寧波まで五六日。大隅から出航、寧波まで五六日、福建まで十日、潮州まで十余日、広東まで十二三日。)

⑧「絶島新編」卷之三：「日本山龍、自閩永寧衛間、抽一脈去深滬、渡海乃結澎湖島。再渡海結小琉球島、魚貫渡海結大琉球。更渡海結大隅、即西島至豊前。」⁽⁴¹⁾ (日本の地脈として、福建永寧衛から一脈が伸び出し、海を渡って澎湖まで結ぶ。再び海を渡って小琉球に結び、引き続き海を渡って大琉球に結ぶ。さらに海を渡って大隅に結び、即ち西島を経由して豊前に及ぶ。)

「窮河話海」卷之一「地脈」には「釣魚嶼」に言及した箇所があるが、これも⑧と同様、福建海岸から澎湖・台湾・尖閣諸島・久米島・慶良間諸島を経て琉球や日本まで繋がる海底地層についての記述で、行政上の隷属関係を述べているわけではない。

⑨「日本之脈起自閩泉永寧間。間抽一枝去深滬、東渡諸海、結澎湖等島。再渡結小東島、一名小琉球、彼云大恵国。自島一脈西南渡海、乃結門雷等国。一脈東北起釣魚、黄蘆、赤坎、古米、馬齒等島、乃結大琉球国。自大琉球一脈東北渡海起硫黄、田嘉、大羅、七島、屋久、種島、間島、白不、硫黄等島、乃結日本。」⁽⁴²⁾ (日本の地脈は、福建泉州、永寧衛より発生したものだ。その一脈が東へと海を渡り、澎湖諸島に結ぶ。更に海を渡って小東島に結び、小琉球とも呼ぶが、日本では大恵国と呼ばれる。そこから西南へと海を渡ってブルネイに到着する。もう一つは東北へと釣魚・黄蘆・赤坎・古米・馬齒等の島を経て大琉球国に結ぶ。さらに、大琉球から東北へと海を渡って硫黄・田嘉・大羅・七島・屋久・種島・間島・白不・硫黄などの島を経て日本に連なる。)

似たような「地脈」の話は、前述した「一自回頭定小東、前望七島白雲峰」詩句の割り注の中にも、もう一つ出ているが、釣魚嶼への言及はなかった。結局、『日本一鑑』における尖閣関連の史料と言え、以上の②③⑨及び「滄海津鏡」見取り図の四点しかない。

ところで、『日本一鑑』の航路記載を精査しているうちに、幾つかの疑問が生じた。一つは使琉球録のように渡航の日付がないこと。もう一つは、針位・更数の記載が途中の「鳥邱→有馬」時点で突如始まり、鄭舜功が到達していないはずの兵庫港をはじめ日本周辺の手路まで記されているのに、出帆した広州虎頭門から福建鳥邱までの航程では空白のままである⁽⁴³⁾。彼の航路記載は果たして自身の体験談なのか、それとも参考書からの転載なのかは定かでない。文中に『海航秘訣』などの海道針経が頻繁に取り上げられたため、転載の公算が大きい。また、陳侃への言及も一度ならず、彼の『使琉球録』を参照したことは間違いない。前述した「萬里長歌」の割り注の他に、下記の例も挙げておく。

⑩「桴海図経」卷頭：「自嘉靖初、給事中陳侃出使琉球、取道福建以往、其従人有識日本路程者。故閩海人因知取道於小大琉球、沿諸海山、一路而去。」⁽⁴⁴⁾ (嘉靖初年、陳侃が福建から琉球へ赴いた時、従者の中に日本航路を知る者がいた。その後、福建の人は小琉球と大琉球を通して、島伝いして渡っていくことを知ることになった。)

⑪「窮河話海」卷六「海市」：「嘉靖甲午、給事中陳侃出使琉球、例由福建津発。比従役人皆閩人也。既至琉球、必候汎風。……此僧言日本可市、故従役者即以貨財往市之、

得獲大利而歸、致使閩人往往私市其間矣。」⁽⁴⁵⁾（嘉靖甲午年、陳侃が琉球に行った時、慣例により福建から出帆し、従者はみな福建出身の人だった。琉球で風待ちする間、……日本人僧侶から日本に行けば商売になると聞き、連中が日本に渡った。皆一儲けして帰ってきたので、福建の人々が日本へと密貿易に行くようになった。）

当時、中国沿海部から日本に渡る密貿易業者が相当いたようだが、航路に関しては熟知に程遠い。「広海人郭朝卿、販稻航海市漳泉。因風漂流至其国、故広海人自後亦知其道矣。若浙海人、則因彼来朝向館寧波、雖聞彼島之名、未聞向方之的。逮今廿有余年、中国私商絡繹市彼、各有路経。但抵其域、市諸貨財而已、誰究彼都之域之詳耶」という⁽⁴⁶⁾。（広東商人郭朝卿は稲を行商するため、船で漳洲・泉州へ向かう途中、嵐に会い日本に漂着した。その後、広東沿海の人たちが日本航路を知るようになった。浙江沿海の人は、寧波に居留する日本人の貿易商が多いことから、日本の名を知っていたが、行った人は聞かない。ここ二十数年、密貿易商が続々と渡るようになり、各々の針路を利用している。ただ、向うに着くと商売ばかりで、誰が日本地理の詳細を調べようとするのだろうか。）

こうした事情から、鄭舜功は渡航準備に着手した当初、先ず船員募集と海道針経探しに苦勞したようだ。その苦勞話は当時の航海事情を知る上で頗る興味深い。

⑫「桴海図経」卷之一卷頭：「歳乙卯、功方奉使日本、取道嶺南。惟時治事偵風、故招司方之人以供其事。司方者、司趨向方之人也。爰究指南之書、而詢蹈海之要、広求博採者。久之、人有以所録之書応者、謂之曰鍼譜。按考日本路経、言之未詳。後得二書、一曰渡海方程、一曰海道経書。此兩者同出而異名也。歴按是書多載西南夷国方程、而日本程途、雖有其名、亦鮮有詳者。一曰四海指南、……国家前所遣使、皆由寧波郡往来之役、雖勞俱未見其方程也。」⁽⁴⁷⁾（乙卯年、日本出使が決まり、広東から出発することにした。手間暇かけて海道針経を研究し、航路を熟知する船乗りを探し求めた。しばらくすると、一人が鍼譜を持って応募してきた。中身を見ると、日本針路は余り詳しくない。後日、『渡海方程』『海道経書』の二書も入手したが、題名が違っても中身は同じだ。どちらも南洋諸国への針路に詳しいが、日本針路は名ばかりで内容は薄い。もう一冊『四海指南』も手に入った。……本朝の使節は皆寧波からの出発が多かったが、彼らの使用した海道針経はまだ見つからない。）

⑬「桴海図経」卷之一「萬里長歌」：「奉使出入韭山前、方位不易指南篇。……[夫此書也、一曰海道経書、一曰渡海方程、一曰四海指南、一曰海航秘訣、一曰航海全書。而俗謂之鍼譜。凡此書者、其名雖異、而事則同也]」⁽⁴⁸⁾（使節の船に乗って韭山を過り、方位を見定めるには海道針経が頼りだ。……『海道経書』『渡海方程』『四海指南』『海航秘訣』『航海全書』などがあり、俗に鍼譜と呼ぶ。題名が違っても中身は大同小異。）

当時、海道針経と呼ばれる航海指南書は色々世に出回っていたものの、日本航路に関する情報は必ずしも満足できるような内容ではなかったことが窺える。

以上の検証を踏まえて、「小東島」「小東小嶼」などの言葉の意味について考えてみたい。先ず、書中の用例を拾い上げると、「小東島即小琉球」「小東之域、有鷄籠之山」「小東島之鷄籠山」「小東巨魷」「澎湖之小東」「釣魚嶼、小東小嶼也」「硫黄之山、非特一処、小東、日本皆有之」などが見られる。中台論客の解釈では、「小東島」イコール「小琉球」で、「釣魚嶼、小東小嶼也」とは、「釣魚嶼は小琉球（台湾）に附属する島」という意味になる。もし然りとすれば、「小東之域」「澎湖之小東」「小東巨魷」などの語句は意味が通じ難い。

実は、「小東島」も「大恵国」も『日本一鑑』のみに登場する用語で、鄭舜功の造語に過ぎない。彼の言う「小東」とは、恐らく「小東洋」の略語ではないかと考える。とすれば、「小東島」は「小東洋の島」、「小東之域」は「小東洋の海域・地域」を意味しているのであろう。明代において、外国地理の概念として「文萊国、即婆羅国、此東洋最盡頭、西洋所自起処也」というように⁽⁴⁹⁾、現在のブルネイ（ボルネオ島）を境に、「東洋」と「西洋」の二つに区分されるが、台湾の呼び名に「東番、人稱為小東洋」という言い方もあった⁽⁵⁰⁾。すなわち、日本・フィリピン・ボルネオを中心とする「東洋」の中で、更に台湾・澎湖・琉球辺りを指して「小東洋」と名付け、表現することもあった。むろん明確な区分ではなく、台湾・澎湖・琉球を含む緩やかな区域を指している⁽⁵¹⁾。「小琉球」は「小東島」であるが、「鷄籠山」「澎湖」「釣魚嶼」も「小東島」ないし「小東之域」に分類され、そこから「小東之域、有鷄籠之山」「釣魚嶼、小東小嶼也」「澎湖之小東」「硫黄之山……小東、日本皆有之」といった言い方が派生したのではないかと思う。釣魚嶼周辺の海域を回遊する「小東巨鮫」というのは、明らかに「小東洋の海に生息するサメ」という意味で、「台湾のサメ」と解釈したら不自然だ。要するに、「釣魚嶼、小東小嶼也」とは、「小琉球の島」ではなく、「小琉球と同じように小東（洋）の島」と解釈すべきだ⁽⁵²⁾。現に、海道針經『按針似看山譜』の「鷄籠山」見取り図を見ると、「小琉球」とかけ離れているところで、「釣魚台」が「鷄籠山」とくっついて描かれ、「見東洋山 即是釣魚台」という書き込みも付しており⁽⁵³⁾、つまり「東洋の山（島）」として認識されているのである。仮に鄭舜功が「釣魚嶼は小琉球に属する島だ」と思い、それを言いたいなら、「釣魚嶼、小東小嶼也」ではなく、「釣魚嶼、小東島之小嶼也」とか「小東島之釣魚嶼」といった表現を使うだろう。

最後に、重要なことを付言しておこう。鄭舜功が「小琉球」を「小東島」と呼んだのは、台湾を「化外之地」「荒服之地」（無主地）と見做すという当時の社会通念に基づいたものだ。事実、1395年成立の『皇明祖訓』では、「小琉球国」も日本・朝鮮・大琉球・安南・真臘・暹羅などと並んで、15の「不征諸夷国名」リストに挙げられている。天啓二年（1622）、澎湖・台湾を占拠し、通商貿易を求めてきたオランダ・東インド会社の艦隊に対し、福建巡撫商周作は澎湖から撤退すれば「然其據台湾自若也已」（台湾を占拠しても関知しない）という言葉質を与えた⁽⁵⁴⁾。『明史』卷三二三を繙くと、「鷄籠」（台湾）は「列伝第二百十一外国四」で「琉球」「呂宋」など諸外国と並列しており、『大清一統志』卷七三四には「台湾……自古荒服之地、不通中国、名曰東番」と明記している⁽⁵⁵⁾。何より、「台湾地方自古未属中国。皇考聖略神威、取入版図」という清雍正帝の聖旨は動かない証拠だ⁽⁵⁶⁾。

終わりに替えて――『籌海図編』『日本一鑑』史料の価値

中台の論客は、「小東島即小琉球」「釣魚嶼、小東小嶼也」などの片言隻語を根拠に、「これが当時中日琉三国の共通認識だ」と言い張るが、三国の文献における同じ用例は寡聞にして知らない。百歩譲って、「釣魚嶼は小琉球に属する島だ」というのが『日本一鑑』の原意だとしても、証拠史料として使えない、いや使ってはいけない「孤証」だ。

鄭舜功は史籍に伝記がなく、無名に近い。正史を繙いても、鄭舜功の名を記した史料は、僅か「前楊宜所遣鄭舜功出海哨探者、行至豊後島、島主亦遣僧清授附舟来謝罪」（『明史』卷三二二「外国三・日本」）、「前総督楊直（宜）所遣鄭舜功、出海哨探夷情者、亦行至豊後」（『明世宗実録』卷四五〇）、「詔發倭僧清授於四川寺院安置。初、清授随侍郎楊宜所遣鄭舜

功至寧波」（『明世宗実録』卷四七一）の三点しかない。『日本一鑑』に至っては、『四庫全書総目』に記載されず、他の文献に言及された形跡もない。1939年に影印刊行されるまで、抄本の存在すら世に知られていなかった。他方、鄭若曾は生前、すでに地理学者として名を遂げ、多種の著作を世に送った。『四庫全書総目』に収録された著述だけでも、『籌海図編』『鄭開陽雜著』『海防図論』『万里海防図説』『江防図考』『日本図纂』『朝鮮図説』『琉球図説』『安南図説』などが数え上げられる。その上、『明史』『武備志』『三才図会』など多くの史籍に参照され、後世の日本研究に大きな影響を与えた。

生涯鳴かず飛ばず、『日本図纂』『籌海図編』を敷衍して『日本一鑑』を編集した鄭舜功だが、著者の鄭若曾に敬意を払うどころか、却って書中随所で扱き下ろし、「日本図纂、籌海図編謬以勘合皆在山口……」とか⁽⁵⁷⁾、「而日本図纂、籌海図編、日本国印久為山口所得……之説」とか酷評する⁽⁵⁸⁾。『籌海図編』をはじめ鄭若曾の著書には、鄭舜功と『日本一鑑』の名前が全く出てこないのに対し、鄭舜功は鄭若曾と『籌海図編』を強く意識し、自己顕示とも誇大狂とも受け取られるような字句が文中に随所見える。曰く、「功因詣闕、過吳門。比有監生鄭若曾聞而顧之、願聞要領。功因出書以示。末若曾曰、昔為図纂図編時、但倭夷事風聞未真。今見是書、惜見不早世、昔纂編類願為改証。功固辞之。若曾復曰、事在国家、願勿我辞。嗟夫、若曾尚未食肉、初見功書、惜乎不早。夫志寧波者、志在家国也、又豈不欲早見功書乎。」⁽⁵⁹⁾（日本から寧波に戻ると、私の噂を聞いた鄭若曾が訪ねてきて教えを乞った。拙著を見せると、「昔『日本図纂』『籌海図編』を編集した時、日本に関する風説を鵜呑みにしただけで、本当のことは知らなかった。今大作を拝読したが、もっと早く読みたかった。できれば自著の改訂に参考させてほしい」と頼んできた。固く断ったが、「お国のために」と再度頼まれた。小役人すらなれない鄭若曾まで、そこまで拙著を必要とするなら、天下国家を預かるお偉いさんはもっと見たがるだろう。）『日本一鑑』が完成されたのは、『籌海図編』が刊行して三年後で、苦心採集した資料は遂に顧みられず、水泡に帰したことへの鬱憤晴らしであろうが、何と言っても、『日本一鑑』の文章は稚拙かつ乱雑で、誤りも多く、『籌海図編』の比べ物にならない。

一方、『籌海図編』の史料価値を巡って毀誉褒貶が相半ばする。『四庫全書総目』では、『鄭開陽雜著』について、「此十書者、江防海防形勢皆所目撃、日本諸考皆諮訪考究得其实据、非剽掇史伝以成書。與書生紙上之談固有殊焉。」（十編の書は、江防・海防の論説が皆実体験に基づいたものだ。日本に関する論考も現地調査を通じて得た情報ばかりで、従来の書物から剽窃したものではなく、書生による机上の空論と大違いだ）と評価し、『籌海図編』に対しても「於明代海防、亦云詳備」と称える。一方、『日本図纂』に関しては、「是書伝聞未実也」（書中の伝聞は信用できない）と指摘する⁽⁶⁰⁾。いずれにせよ、『籌海図編』『日本一鑑』に見られる尖閣諸島関連の史料は、琉球航路の標識島を意味するに過ぎず、いずれも海道針経や使琉球録に依るもので、中台の主張をサポートする根拠にはならない。

注

(1) 鄭若曾『日本図纂』、『日本史料彙編』（一）全国図書館文献縮微複製中心、2004年、109～110頁。

(2) 鄭舜功の渡日時期・経緯などについて不明な点が多い。本人の回想や愚痴は、『日本一鑑』の随所に散

見られるが、「窮河話海」巻之八「評議」と巻之九「接使」に集約している。本稿の史料引用は、基本的に『日本一鑑の総合的研究 本文篇』（木村晟等編輯、梅田信隆禅師退董記念出版刊行委員会企画、椋伽林発行、1996年）という文殿閣影印本に依るが、必要に応じて三ヶ尻浩校訂謄写本（昭和12年）を参照することもある。

- (3) 鄭瞬功自身も「功幼寡学、少不師章句」（前掲『日本一鑑』「窮河話海」巻之六「海市」、364頁）とか、「功賤学疎、不登科甲」（「窮河話海」巻之九「接使」、473頁）とか告白し、自らの浅学を認めている。
- (4) 「絶島新編」巻之一、巻頭、同上、5～6頁。
- (5) 「窮河話海」巻之一、巻頭、同上、149～150頁。
- (6) 鄭若曾撰、李致忠點校『籌海図編』中華書局、2007年、159頁。
- (7) 新安少保胡宗憲編輯、茅鹿門先生鑒定『籌海図編』本衙蔵版、巻八、8頁。『籌海図編』の著者や版本考証について、李致忠『籌海図編』「點校説明」、田中健夫「籌海図編の成立」（同氏『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会、2002年）に譲りたい。なお、本稿の史料引用は基本的に中華書局版に依るが、必要に応じて本衙蔵版を参照することもある。
- (8) 「福建沿海山沙図」、前掲鄭若曾撰、李致忠點校『籌海図編』、38～41頁。
- (9) 「輿地全図」、同上、2～3頁。
- (10) 「福建沿海総図」、同上、250～251頁。
- (11) 「漳州府境図」「泉州府境図」「興化府境図」「福州府境図」「福寧州境図」、同上、252～261頁。
- (12) 「日本島夷入寇之図」、同上、211～212頁。
- (13) 『日本図纂』、前掲『日本史史料彙編』（一）2004年、138頁。
- (14) 「万里海防図第六幅」、曹婉如編『中国古代地図集・明代』文物出版社、1995年、No.200。
- (15) 「万里海防図第五幅」『鄭開陽雜著巻八・海防一覽』<https://archive.org/details/06041968.cn/page/n44>
- (16) 『琉球図説』、前掲『日本史史料彙編』（六）「琉球国図」217～218頁、「山川」227頁。
- (17) 「経略三 禦海洋」、前掲『籌海図編』巻十二上、770頁。
- (18) 「万里海防図第二幅」、前掲『中国古代地図集・明代』、No.198。
- (19) 「図式辨」『鄭開陽雜著巻八・海防一覽』<https://archive.org/details/06041968.cn/page/n52>
- (20) 「経略三 鼓軍気」、前掲『籌海図編』巻十一下、743頁。
- (21) 『明史・日本伝』に「……船弊伍虚、及遇警、乃募漁船以資哨守。兵非素練、船非專業。見寇舶至、輒望風逃匿、而上又無統率御之。以故賊帆所指、無不殘破」とある。
- (22) 「日本紀略」、前掲『籌海図編』巻二下、179頁。
- (23) 「経略三 禦海洋」、前掲『籌海図編』巻十二上、771頁。
- (24) 同上、769～770頁。
- (25) 「浙江事宜」、前掲『籌海図編』巻五、369頁。
- (26) 博学の鄭若曾と雖も、中国古代文人にありがちな術学の癖を免れない。参考文献で読んだことを何もかも、むやみやたらに自著に織り込む一方、出典も明かさない。
- (27) 「経略三 禦海洋」、前掲『籌海図編』巻十二上、763頁。
- (28) 中央研究院歴史語言研究所『明実録』、1966年、『明神宗実録』巻560、10557頁。
- (29) 「浙江倭変紀」、前掲『籌海図編』巻五、320頁。
- (30) 「直隸倭変紀」、前掲『籌海図編』巻六、400頁。
- (31) 前掲、中央研究院歴史語言研究所『明実録』、『明世宗実録』巻545、8805頁。
- (32) 「桴海図経」巻之一「萬里長歌」、前掲『日本一鑑』、486頁。

- (33) 同上、486～487 頁。
- (34) 同上、487 頁。
- (35) 同上、496 頁。
- (36) 「桴海図経」卷之二、「滄海津鏡」、499～501 頁。
- (37) 「窮河話海」卷之七、「貢道」、413 頁。
- (38) 「絶島新編」卷之一、37 頁。
- (39) 同上、50 頁。
- (40) 「絶島新編」卷之三、100～101 頁。
- (41) 同上、107 頁。
- (42) 「窮河話海」卷之一、「地脈」、157～158 頁。
- (43) 「万里長歌」の他に、「窮河話海」卷之七「貢道」（413～414 頁）も同じである。
- (44) 「桴海図経」卷之一、卷頭、482 頁。
- (45) 「窮河話海」卷之六「海市」、355 頁。
- (46) 「桴海図経」卷之一、卷頭、482 頁。
- (47) 同上、481～482 頁。
- (48) 「桴海図経」卷之一、「萬里長歌」、494 頁。
- (49) 張燮著、謝方點注『西洋朝貢典録校注 東西洋考』中華書局、2008 年、卷五「東洋列国考・文萊」、102 頁。卷九「舟師考・東洋針路」、184 頁。
- (50) 同上、卷九「舟師考・東洋針路」、185 頁。
- (51) 例えば、汪大淵『島夷誌略』（1349 年）「尖山」条に「茲山盤據于小東洋」とある。利瑪竇 (Matteo Ricci) が製作した「坤輿万国全図」（万歴三十年、1602 年）を見ると、現在ハワイ附近の太平洋に「大東洋」、日本の東の海中に「小東洋」、ポルトガルの西の大西洋に「大西洋」、インド洋に「小西洋」とそれぞれ記されている（前掲『中国古代地図集・明代』、No.77）。また、『三才図会』の「山海輿地全図」においても、「大東洋」「小東洋」「大西洋」「小西洋」などの表記が見られる（前掲『中国古代地図集・明代』、No.222）。もっとも、明代知識人の海外知識は極めて大雑把で、黄省曾『西洋朝貢典録』（1520 年）卷上「琉球国」では、現在の沖縄と台湾、つまり大琉球と小琉球双方を混同しており、嚴從簡『殊域周諮録』（1574 年）卷之四「琉球国」の中には澎湖に関する記述も混ざっている。
- (52) 「小東島」「小東小嶼」用語の意味について、尾崎重義「日中史料解説 中国の主張を徹底論破する」（『新朝』45、2012 年 10 月号）を参照。
- (53) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵『按針似看山譜』（マイクロフィルム複製）、20 頁。
- (54) 『続文献通考』卷二百三十八「四裔二・和蘭」、台北新興書店、1965 年、考 4740 頁。
- (55) 王雲五主編『嘉慶重修大清一統志』九、台湾商務印書館、1966 年、5665 頁。
- (56) 「清実録雍正元年」、張本政主編『《清実録》台湾史資料專輯』福建人民出版社、1993 年、96 頁。
- (57) 「窮河話海」卷之七「勘合」、前掲『籌海図編』、402 頁。
- (58) 同上、「印章」、429 頁。
- (59) 「窮河話海」卷之八「評議」、453 頁。
- (60) 永瑤等撰『四庫全書総目』上冊、卷六九、中華書局、1987 年、617、616、679 頁。

附記 本論文は、山陽学園大学令和元年度学内研究補助金によって進められている研究成果の一部であり、ここにて厚く謝意を表する。